

中国のほんの話(33)

中国語上達の秘訣

蔭山 達弥



中国語の学習に一生懸命に取り組んでいるのに、なかなか思うように成果が上がらないと日々悩んでいる学生諸君は多いと思います。特に、聞き取りと話す能力は一朝一夕に伸びるものではありません。特効薬があれば私もあやかりたいものです。そこで、多くの学生諸君は現地（中国）に留学すれば何とかできるのではないかと考えます。ところが、現実はそのような甘いものではありません。今回ご紹介する『女は中国語でよみがえる 語学を武器に飛躍する必勝ガイド』（はまの出版、2003）の著者、翻訳者の佐藤嘉江子さんは出版社勤務を経て、旅行をきっかけに中国に目覚め、34歳から中国語の勉強を始めてプロの翻訳者になった人ですが、中国語上級者をめざす人に向けて、レベル別の効率的な勉強法、留学の心得、語学で仕事をしていくヒントなど自らの体験を交えながら紹介します。

「千里の道も一歩から」、「語学に近道はない」と言われますが、佐藤さんは猛勉強の末、たった4年でプロの翻訳者として活躍するようになりました。彼女は「コツ」をつかんだからこそプロとして通用するレベルにまで語学力を向上させたのです。漠然と中国に行けば何とかできると考えている貴方、彼女の体験談に耳を傾けてください。

「中国にいれば会話の練習の機会には事欠かないように思えるが、実際には、留学生が中国人と中国語で本格的な会話するチャンスは、そう多くはない。先生方や寮の職員は留学生を扱い慣れているから、手加減して話してくれる。相互学習の相手も同様だ。相互学習とは日本語を学ぶ中国人と互いに教えあう勉強法だが、この場合、相手は日本語を勉強している学生だから、ちょっと難しい内容になるとつい日本語を使ってしまい、あまり鍛えられない。学校の外の食堂や商店の店員とは、挨拶を交わす程度で、内容のある会話はあまり期待できない。本当の意味での実践会話ができるのは、旅行に行ったときくらいだ。（第3章、89ページ）」

いかがですか。これが現実です。要は日本にいても、現地にいても、本人の心がけ次第で何とでもなるのです。佐藤さんが語る入門から初級にかけての心構えです。

いい年をして「イロハ」からやるということを肝に銘じよう

発音のコツは日本人に教えてもらい、発音のチェックは中国人にやってもらおう

基礎文法をしっかりと身につけよう

ラジオ講座やテレビ講座を活用しよう（放送の時間に合わせてラジオの前に座る）

習った単語や表現はどんどん使ってみよう。旅でなくても恥はかき捨て。羞恥心を捨てて、どしどし間違えよう

目についた漢字を中国語読みしてみよう

中国語の言語的特性、言語の背後にある文化を意識するようにしよう

辞書を丹念にひこう（「こまめに」ではなく「丹念に」）

詳しくは本書をご覧ください。中国語の能力を伸ばそうと思っている人は目からウロコが落ちるでしょう。同じ出版社から出ている『中国の子供はどう中国語を覚えるか』（李凌燕著、はまの出版、1996）、『中国の小学生はどう中国語を覚えるか』（同、はまの出版、1998）は日本で生まれ、北京の小学校に入学した京京（著者のお嬢さん、7歳）が体験する合理的でわかりやすい中国語の学習法の数々（歌やゲームなど）を日中の文化比較も交えて紹介した本で、中国語の背景にある中国の社会や文化にも触れられる一冊です。

かげやま たつや（教授・中国文学）